研究情報 3

東北地方に適した多収ハトムギ新品種「はとゆたか」の育成

作物機能開発部　資源作物育種研究室
加藤晶子
KATO, Masako

ハトムギは耐湿性が強く，湿田でも栽培可能なことから水田転作作物として栽培されています。主な栽培地域は東北地方で，平成15年度は全国の栽培面積の54%を占めており，産地ではハトムギ商品開発により特産化を図っています。そのため，ハトムギの安定供給，収益向上の面から生産力の高い品種が強く望まれています。今回育成した「はとゆたか」は東北地方の栽培に適した熟期のやや早い品種で，収量性が優れているため，産地のハトムギ栽培振興と生産性の向上に貢献することが期待されています。

はとゆたか　はとじろう
写真1：「はとゆたか」の草姿

《「はとゆたか」の生い立ち》

「はとゆたか」（東北３号）（写真１）は熟期が早く，草丈が低い，多収品種の育成を目標として，昭和63年に，熟期が早く，草丈の低い系統F_6－22（のちの「東北１号」）を母とし，熟期が遅く草丈は高いが，多収の系統「奥羽４号」を父として人工交配を行い，以後，熟期が早く，草丈が低く，収量が多い特性を合わせ持つ系統の選抜を続け，平成16年９月30日に命名登録されました。

《「はとゆたか」の特徴》

「はとゆたか」は東北地方で最も多く栽培されている「はとじろう」と比較して次のような特徴があります。草丈は「はとじろう」よりやや長いが，分類は同じ“短”に属します。着粒層は「はとじろう」より広いです。殻実の百粒重は「はとじろう」並の“やや重”で，形は長楕円で，色は茶褐色です。茎数は「はとじろう」と同程度です。出穂期は「はとじろう」とほぼ同じで，成熟期は「はとじろう」より遅く，“中の早”に属します（写真２）。標準栽培における収量は「はとじろう」より多いです（図１）。耐倒伏性は「はとじろう」並で，脱粒性は同じ“易”です。葉枯病に対して「はとじろう」と比べ罹病することがあり，“やや弱”となっています。殻実の硬さは「はとじろう」より軟らかく，子実歩留は「はとじろう」よりわずかに低いが，同じ“中”に属します。加工業者によるお茶加工適性は同等～良で，焙煎粒の外観品質が優れると評価されました。

写真２：「はとゆたか」の成熟期の状況

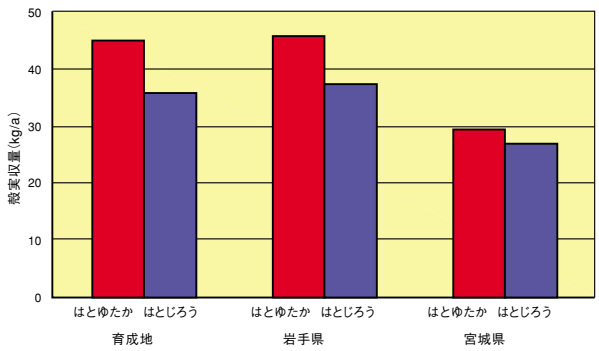

図1. はとゆたかの育成地（盛岡市）および岩手県，宮城県における殻実収量

注. 育成地は平成11～15年の成績，岩手県は岩手県農業研究センターにおける平成13～15年の成績，宮城県は宮城農業研究センターにおける平成11・12年および古川農業試験場における平成13～15年の成績

《適応地帯と栽培上の留意点》

「はとゆたか」の栽培適応地帯は東北地方です。岩手県中・南部，及び，宮城県内で栽培される予定です。

栽培上の留意点としては，密植により多収となりますが，倒伏することがあるので注意する必要があります。葉枯病発生時には連作を避け，発生初期に薬剤（ロブラール水和剤）を散布して下さい。脱粒し易いので，刈遅れないように注意が必要です。他家受精しやすく，他の品種やジュズダマと容易に交配するため，品種の特性を維持するために，採種栽培においては他の品種やジュズダマから隔離して栽培する必要があります。